

16 平成30年 県内病害虫の発生経過と特徴

病害虫防除対策担当 高井 芳久

当担当では、県内主要16作物に被害を及ぼす恐れがある176病害虫の発生状況について、87調査地点、予察灯8ヶ所、フェロモントラップ等調査31ヶ所の発生状況を調査、分析し、翌月の発生予報などの情報提供を行っています。

（1）気象経過

本年の気象経過は、気温は3月上旬から高い傾向が継続し、特に7月23日には熊谷で日本最高気温の41.1℃が観測されました。

降水量は、変動が大きく経過し、夏季には乾燥傾向であったが、9月には台風の影響により平年を超える降水量が観測されました。

（2）作物ごとの病害虫発生状況

ア イ ネ

イネ縞葉枯病は、媒介虫であるヒメトビウンカの越冬世代のウイルス保毒虫調査で3年ぶりに増加がみられましたが、第1世代成虫の発生量はやや少なくなりました。

育苗期防除の徹底が図られたこともあり、発生面積は多かったが収量に影響する被害はほとんど見られませんでした。

イネ紋枯病は、前年の1.8倍、一昨年2.9倍と発生量が多くなりました。

イネいもち病、稲こうじ病の発生は少なくなりました。

斑点米カメムシは、6月に発生が多かったが、その後は多発せず終息しました。

イ 麦 類

うどんこ病、赤さび病がやや発生したが、発生量は少なくなりました。

ウ 大 豆

葉焼病の発生がやや多くなりました。

べと病は、播種期が遅いものを中心に8月下旬に発生がみられたが、昨年ほどの多発生は見られませんでした。

吸実性カメムシ類の発生は多く、適切な防除が行われていないほ場では莢への被害が見られました。

ハスモンヨトウのフェロモントラップへの誘殺数は平年に比べ多く、一部ほ場では被害が認められました。

エ ナ シ

黒星病、赤星病の発生は全般的に少なく推移しました。

アブラムシ類、ハダニ類は一部園地で多発も見られたが9月には終息しました。

オ 茶

炭疽病、輪斑病は全般的に発生は少なく推移しました。

チャハマキ、チャノコカクモンハマキの第1世代成虫は平年より早かったが、発生量は少なく推移しました。

チャノミドリヒメヨコバイ、チャノキイロアザミウマの発生は、8月まで少なかったが9月に多発しました。

カ 野菜

本年は、オオタバコガ、シロイチモジヨトウの発生が早く、フェロモントラップ誘殺数が平年より多く推移したことから注意報を発表しました。

(3) 発表した注意報

ア 野菜類、花き類のオオタバコガ (平成30年8月8日発表)

イ ネギのシロイチモジヨトウ (平成30年8月8日発表)

(4) 発表した特殊報

ア トビイロシワアリ (特殊報第1号)

平成29年10月に、きゃべつ、

ブロッコリーで被害確認。

現在、14都県で被害確認。

体長は約2.5mm 体色は褐色から黒褐色。



成虫の側面



地際部の食害

イ オリーブアナアキゾウムシ (特殊報第2号)

平成29年5月に、オリーブ樹木で被害確認

本州、四国、九州、八重山諸島に分布。

体長は12~15mm。



成虫



株元の被害

ウ トマト黄化病 (特殊報第3号)

平成30年3月に、施設トマト及びミニトマトで被害確認。

病原ウイルス トマト退緑ウイルス (ToCV)

現在、19都県で被害確認。

葉脈に沿った部分を残し葉全体が黄化、壊死する。

タバココナジラミ及びオンシツコナジラミにより

媒介。



トマトの被害

詳細については

病害虫防除所ホームページ

<http://www.pref.saitama.lg.jp/soshiki/b0916/>

